

## ボーデン湖畔の町リンダウとリンダウ会議

客員研究員 増田芳雄

### はじめに

「ノーベル・フラウエン」(Folsing, 1991, 田澤 仁・松本友孝訳, 1996) に以下の記述がある:

“1964年のノーベル化学賞受賞者で81歳のドロシー・ホジキン=クロウフット<sup>1)</sup>は、いまなお存命中の5人の女性受賞者のうち、ドイツでときどき会うことができる唯一の人物である。彼女はいつもボーデン湖畔のリンダウで行われるノーベル化学賞受賞者の会合に現れる。”

“1989年7月に行われたボーデン湖畔の町リンダウでのノーベル賞受賞者の集いで、ドロシー・ホジキン=クロウフットは自分の昇っていった緊張に満ちた研究生活の階段について次のように述べている。「私は興味深い結晶構造を原子の解像力の限界にまで解明することを目的として、小さな研究グループをゆっくり作り上げて行きました。・・・”

1) Dorothy Hodgkin は1910年カイロ生まれのイギリス人。オックスフォード大学で化学を専攻、1932年卒業、ケンブリッジ大学に移って研究を続け、1934年に学位を得た。1949年ペニシリンの構造に関する業績を挙げ、1956年にはビタミンB<sub>12</sub>の構造を発表し、これらの業績によって1964年、ノーベル化学賞が授与された。

このボーデン湖東北隅の湖畔、ドイツ・バイエルン州の小さな町リンダウは日本では一般にはあまり知られていないが、かつては神聖ローマ帝国都市であった歴史ある観光の町であり、また、戦後はノーベル賞受賞者の会合の開かれる町でもある。まず、ドイツ・スイス・オーストリア国境をなすボーデン湖について述べたい。

### 1. スワビアとボーデン湖

ボーデン湖(Bodensee)の位置するドイツ南西部のスワビア(Swabia)はかつて中世の公国であったが、現在のバーデン・ヴェルテンベルク州(Baden-Württemberg)、バイエルン州(Bayern)を含む地域で、当時その首都はアウグスブルク(Augsburg)であったという。シュットガルト(Stuttgart)や大学町チュービンゲン(Tübingen)のあるシュワーベン(Schwaben)地方にスワビアの名が残る。ここには南北に伸びる美しい山や谷の“シュワーベンのアルプス”(Schwäbische Alp)があるが、西のフライブルク(Freiburg i. Br.)の北に伸びる“黒い森”(Schwarzwald)(フライブルクの西北には小高い“皇帝の椅子”|Kaiserstuhl|があり、ドイツを誇るブドウ酒が有名である)は典型的なドイツの森として有名である。また、ここから東方、南のスイス、オーストリアと北のドイツ国境には峨峨たるアルプスが東西に走っている。

ドイツ・フランス国境をなすライン地方を通過してオランダに達するライン河(Rhein)はアルプスの山からの清水がボーデン湖に注ぎ、西へとドイツ・スイス国境をシャフハウゼン

(Schaffhausen) 近くの“ラインの滝”(Rheinfall) を経て流れ出す。このボーデン湖は英語では“コンスタンス湖”(Lake of Constance) と呼ばれるが、それは湖の中程でくびれた地域にある町、コンスタンツ (Konstanz) に由来している。コンスタンツも面白いところで、大学のあるコンスタンツはドイツ領であるが、南はスイス領である。また、のちに述べるマイナウ島 (Mainau) は湖の中央部にある小さな島で、ドイツ・スイス国境に位置しているが、1928年、スウェーデン王室が買い取っていらいスウェーデン領である。今も島の入り口には国境を接するドイツ・オーストリア・スイス3国とスウェーデンの合計4カ国の国旗が掲げられている。

このように、ボーデン湖は中央ヨーロッパ最大の湖で、ドイツ・オーストリア・スイス3国との国境をなしており、国境線が複雑で(図1)、地図をよく見ないとどの町がどの國に属するかわからないほどである。湖の周囲は273キロメートル、そのうち173キロメートルはドイツ、72キロメートルはスイス、そして28キロメートルはオーストリアである。この湖が現在の形となったのは、今から約15,000年前、氷河期の後期、ライン氷河が大陥没して形成されたといわれる。最水深254メートルで、全水量は48,500立方メートルあり、ライン河に1時間あたり320立方メートルの水を注ぐ。気候温暖で、森や湖の資源に富み、土着の原住民が漁業などで生活を営んでいたが、古くはローマが進出し、さらに神聖ローマ帝国が支配、複雑な歴史的背景をもつこの地域である。

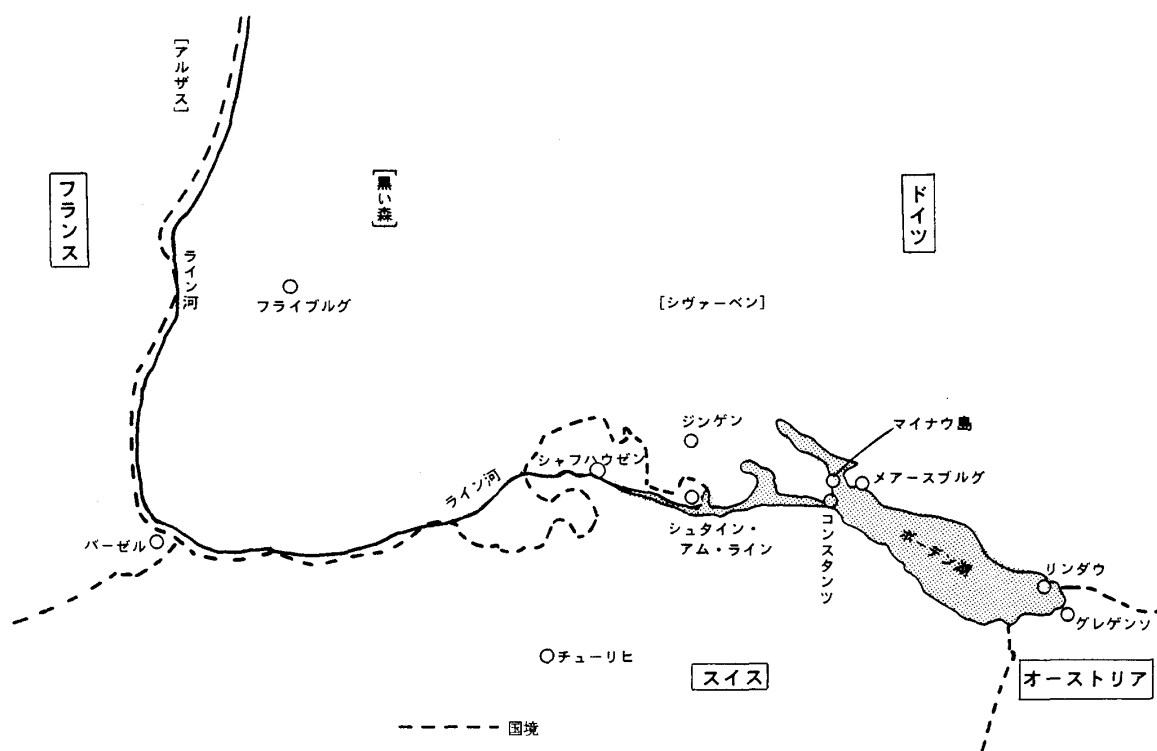


図1. ボーデン湖周辺の複雑な国境線とライン河。シュタイン・アム・ラインはボーデン湖からライン河が西方に流れる河畔に位置し、この部分とシャフハウゼンの部分でスイスが北へ突出している。また、リンダウはボーデン湖東北部の島で、オーストリアの国境がすぐ南にある。

## 2. ボーデン湖周辺の国境の町々とリンダウ

筆者は機会を得てボーデン湖を訪ね、それぞれの土地の歴史と文化の片鱗に接し、入り組んだ国境線の姿を見ることができた。筆者の辿ったルートは、フライブルク方面、すなわちライン河に沿って西から東へ、シャフハウゼン (Schaffhausen、スイス)、ラインの滝 (Rheinfall、スイス)、シュタイン・アム・ライン (Stein am Rhein、スイス)、ボーデン湖のマイナウ島 (Mainau、スウェーデン)、メアースブルク (Meersburg、ドイツ)、アッペンツェル (Appenzell、スイス)、ボーデン湖畔のオーストリア領ブレゲンツ (Bregenz) を通りリンダウ (Lindau、ドイツ) を経て、ガルミッシュ・パルテンキルヘン (Garmisch-Partenkirchen) へと巡るものであった。しかし、3国の国境を越えることを目的にこのようなルートをとったのではなく、ライン河を遡って主としてボーデン湖の南側を西から東へ (東から西でも同様) 訪ね、東北端のリンダウに達すれば、必然的に国境を何回か通過することになる。この旅でも、スイス・ドイツ・スイス・オーストリア・ドイツと、ボーデン湖の西から東へ旅する間に4回も国境を通過したわけである。複雑ではあるが、反面この地域の歴史的・文化的な興味は尽きない。

シュタイン・アム・ラインからライン河を遡り、湖の南岸を東進し、コンスタンツをさらに東に進むとオーストリア領に入る。湖岸の町、最近では湖上オペラで知られるブレゲンツを過ぎる間もなくドイツ領に入る。ボーデン湖の東南隅から南に向かう橋を渡るとリンダウである。北岸から南にある島、リンダウ (Lindau) は現在ではボーデン湖遊覧の中心地であり、アルペン街道 (Alpenstrasse) の始点でもある。

表1. リンダウとヨーロッパの歴史概表

---

313	コンスタンチヌス、キリスト教を公認
375	ゲルマン民族の大移動
395	ローマ帝国、東西に分裂
476	西ローマ帝国滅亡
481-751	メロヴィング朝 (フランク王国最初の王家)
527	東ローマ帝国の時代
800	カール西ローマ帝国
882	リンダウ記録に現る
962	神聖ローマ帝国の成立
1096	第1回十字軍
1256	ドイツ大空位時代
1275	リンダウ帝国直轄自由都市
1299	オスマントルコ建国
1453	東ローマ帝国滅亡
1517	ルターの宗教改革
1524	ドイツ農民戦争
1618	ドイツ30年戦争
1648	ウェストファリア条約
1789	フランス革命、その後ナポレオン戦争
1805	リンダウ、バイエルン州に入る
1814	ウィーン会議
1871	ドイツ帝国成立
1914	第1次世界大戦

---

リンダウが記録にのったのは紀元882年であるが(表1)、その前、紀元800年、この島に修道院が建てられたという(Kootz, 2000)。以後、この島にある町は神聖ローマ帝国都市としての地位を保ち、スワビアにおけるもっとも裕福な市として知られるようになり、さらに“スワビアのヴェネチア”と呼ばれるようになった。その後数世紀にわたり、イタリアとの貿易によって繁栄が続いた。とくにミラノと関係が深く、15世紀から19世紀にわたり郵便、各種物資、旅行者がアルプスを越して安全に馬車などで両市の間を往復した。1496年には神聖ローマ帝国議会がここで開かれたことをリンダウは誇りとしている。しかし、海運の発展とともにリンダウの貿易中心市としての繁栄にかげりが出てきた。そして、1802年、神聖ローマ帝国崩壊とともに直轄の自由市としての地位を失い、ナポレオンによってリンダウは1805年、バイエルン州に所属するに至った。しかし、その後1835年以後、蒸気船、そして1853年以後は新設の鉄道による貿易網ができ、リンダウの繁栄は回復した。今日では毎年数10万の旅行者がここを訪れる観光都市として栄えている。

このような歴史をもつリンダウは歴史的建造物をよく保存している。リンダウのある島は対岸の本土とは車両のための橋、鉄道と自転車、歩行者のための橋、と2本の橋でつながり、その間は“小さな湖”(Kleiner See)と呼ばれ、ボートやヨット遊びができる湖面である。ボーデン湖に面した港の入り口には、1856年に建てられた高さ33mの“新灯台”(Neuer Leuchtturm)があり、その展望台に昇るとボーデン湖全体からアルプスを見晴らすことができる。この灯台の港口を挟んだ反対側には高さ6mの“バイエルンのライオン”(Löwenmole)がある(図2)。これも

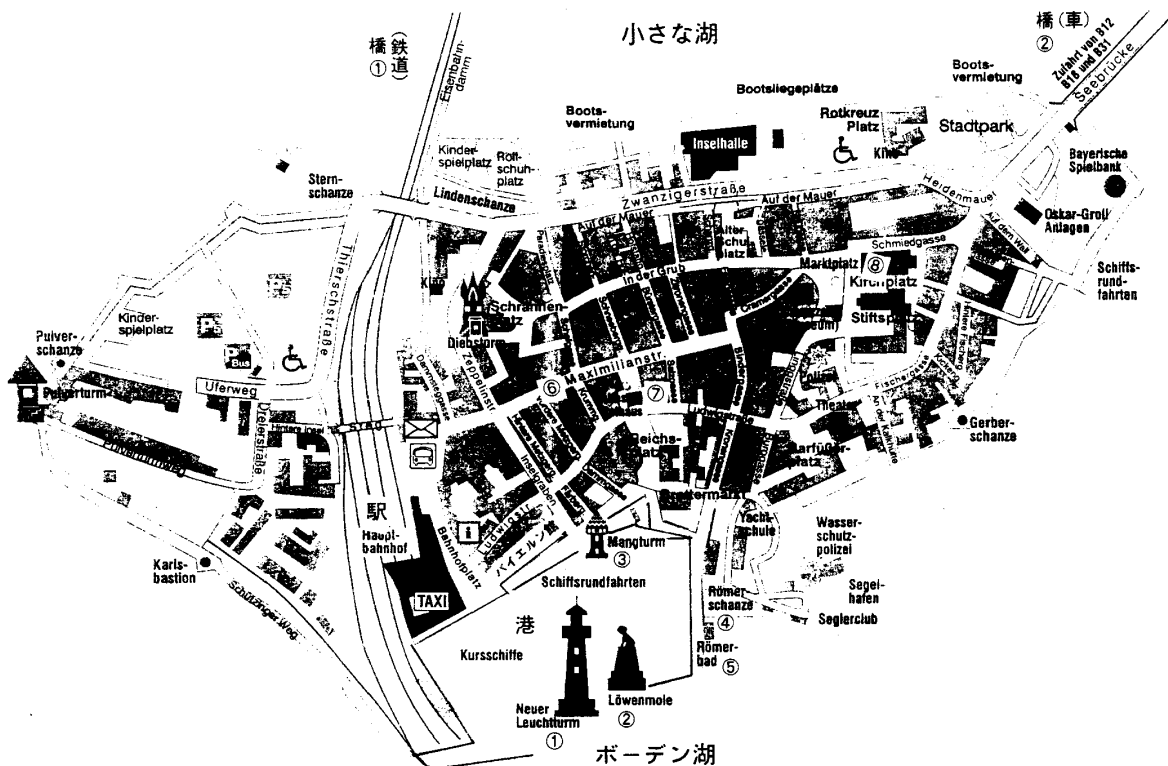


図2. リンダウの中心部。1：新灯台；2：バイエルンのライオン；3：古い灯台；4：ローマの塔；5：ローマの浴場；6：マキシミアン通り；7：古い市役所；8：聖シュテファン教会。

港を監視するように立っている。港の内部には“古い灯台”（Mangturm）が残されているが、これは13世紀以来、市の防備のための灯台として役立ってきた美しい建造物である。港の西端には鉄道駅があり、そこから東に伸びる湖岸は旅行者の広い遊歩道になっている。また、港の東にはローマの遺跡があるが、砦（Römer Schanze）は1812年、破壊された（ナポレオン軍により？）とプレートに記されており、現在はその跡が残っている。また、その南にはローマの浴場（Römerbad）跡がある。

町の中心を東西に走るメインストリート、マキシミリアン通り（Maximilianstrasse）の両側には中世以来のギルドの名残を表す歴史的な建物が並んでおり、それぞれ名前がついている。たとえば、Sunfzen（音をたてながら飲食する；19世紀までは宿屋、集会所）、Regenbogen（虹）、Schnegg（かたつむり）、Pflug（農業用すき一鋤）、Brotlaube（パン屋？）、Rad（車輪）など。また市内にはその他、古い建造物が残されている。1422-36年に建てられた古い市役所の壁画は美しい（図3）。この中のゴチックのホールで1496年に帝国議会が開かれた。また、



図3. リンダウの市役所（マキシミリアン通りから。筆者撮影）。

建物内部の図書館には14世紀以来の書籍や記録が23,000部収納されているという。その他、12世紀に建てられた聖シュテファン教会や13世紀のフランシスコ派僧院、など古い建造物が市内のあちこちに見られる。鉄道駅の東、港のプロムナードを隔てて湖に面した絶好の場所に立つ当市随一の伝統的ホテル“バイエルン館”（Bayerischer Hof、図4）の3階、湖に面した眺望のいい部屋に泊まった筆者には、港口の両側に立つ2つの塔が夜ライトアップされた美しい光景が眼に残っている。

ヨーロッパで歴史的に有名な国境で、戦争のたびにドイツ・フランス紛争のおこるのはアルザス・ロレーヌ地方（Elsass-Lothringen）であろう。シュトラスブル（Strasbourg）を中



図4. リンダウの湖に面した眺めの良いホテル”バイエルン館” (Bayerischer Hof)。ここにリンダウ会議参加のノーベル賞受賞者が宿泊する (筆者撮影)。

心とするこの地方におけるドイツ・フランスの紛争は宗教的なものから次第に政治的性格を帯びた30年戦争 (1618-48) に始まる。この「アルザス・ロレーヌ問題」については研究が多くなされ、成書も多い。この「アルザス・ロレーヌ問題」には、この地域の東に隣接するドイツ・ライン地方 (Rheinland) が緊密にからみ、事態が複雑であった (加藤雅彦、1999)。これらの地域はローマ以来の歴史をもち、当時の遺跡も多く残されている。また、キリスト教の歴史という観点からでもライン地方とアルザス・ロレーヌ地方は重要で、アーヘン (Aachen、現在の所属国はドイツ)、ケルン (Köln、ドイツ)、トリアー (Trier、ドイツ)、シュトラスブール (Strasbourg、フランス)、コルマル (Colmar、フランス) など、現在でも歴史的にきわめて興味ある大小都市が集まっている。

欧州連合 (EU) が成立して以来、ヨーロッパにおける国境のもつ意味は一変したが、連合加盟国の政治・経済状態はさまざまで、未だに多くの問題を抱えている。各国間の経済的なアンバランスはもとより、政治的にも、たとえばオーストリアの右翼政党からの入閣に対するEUの干渉など、欧州連合の機能はまだ十分に発揮されていない面が散見される。

### 3. ノーベル賞受賞者のリンダウ会議

このリンダウにはまた学問にとって特別な意味をもつ。1951年以来、毎年夏の7-8月、このリンダウの市立劇場でノーベル賞受賞者の会合が開かれ、本稿執筆の2000年はちょうど第50回会議が開かれた年に当たった。市立劇場の壁に「ノーベル医学・生理学、物理学、化学賞受賞者の第50回会議」と記したプレートが示されていた。受賞者たちは筆者も利用した「バイエルン館」に泊まるという。

冒頭に引用したホジキン=クロウフットのボーデン湖会議のほか、いくつかの書籍にもリン

ダウで開かれた受賞者の会合のときの写真が掲載されている。たとえば、1962年に開かれた会合で、物理学賞受賞者ニルス・ボーア<sup>2)</sup>とヴェルナー・ハイゼンベルク<sup>3)</sup>が写っている(ハイゼンベルク、山崎和夫訳、1984)。また、別の本(クレプス、丸山工作、丸山 匠訳、1982)では1966年にリンダウで開かれた会合で、医学・生理学賞受賞者オトー・ワールブルク<sup>4)</sup>とハンス・クレプス<sup>5)</sup>の写真が掲載されている。

- 2) Nils Bohrは1885年コペンハーゲン生まれのデンマークの理論物理学者。コペンハーゲン大学で物理学を学び、1911年「金属の電子論の研究」で博士の学位を得、ケンブリッジ大学でJ. J. トンプソンの下で研究し、ケンブリッジ大学紀要にこの電子論の論文を投稿したが却下された。マンチェスター大学講師を務めた後1916年コペンハーゲン大学教授となった。1921年研究所を創設し、所長となった。彼の没後この研究所は「ニールス・ボーア研究所」と改称された。1922年、「原子の構造と放射に関する研究」に対してノーベル賞が授与された。アインシュタインと論争し、ハイゼンベルクに刺激を受け、原子構造に関する研究の端緒を開いた。また、「光と生命」など生物物理学を開拓した。1935年以後核反応の研究を行い、のちの原子爆弾開発に一役買った。ユダヤ系のため、1943年デンマークを脱出、スウェーデン、イギリスを経てアメリカに渡り、原爆計画に参加した。1945年帰国し、科学と平和について見解を発表、国家間の相互理解を訴えた。1962年死去 {培風館「物理学辞典、1986}。
- 3) Werner Heisenbergは1901年、ヴェルツブルクにおいてギリシャ語学者の子として生まれ、ミュンヘンで育った。はじめ数学を学んだが、のちに理論物理学へ転じ、ゲッチンゲン大学で学位を得た。1924-25年、コペンハーゲンのボーアの下に留学、ゲッチンゲンへ帰り、「量子論」に関する歴史的論文を書き、1927年、わずか27歳でドイツ最年少の教授としてライプチヒ大学に赴任した。1932年、「量子力学」の研究によりノーベル賞を受賞した。第二次世界大戦勃発とともに「ウラン計画」の指導者となり、1942年以来、ベルリンのカイザー・ウィルヘルム物理学研究所所長兼ベルリン大学教授となった。戦争中ナチスに協力したという非難を受けた。終戦後、ドイツにおける原爆計画の調査のため、という名目でイギリスに8ヶ月間抑留された。帰国後、マックス・プランク研究所創設に努め、ミュンヘンの研究所所長となった。これら数々の業績を挙げ、1976年死去 {培風館「物理学辞典、1986}。
- 4) Otto Warburgはベルリン大学物理学教授エミル・ワールブルクの子として1883年ベルリンで生まれた。ベルリン大学で有機化学を学んで学位を得、のち医学に転じた。ナポリの臨海実験所でウニ卵の呼吸測定を行った後、カイザー・ウィルヘルム研究所所員となった。1931年に同生物学研究所所長となり、「呼吸酵素の発見」でノーベル賞を受賞した。呼吸の研究で検圧計を開発し、光合成の光量子効率の研究、あるいはガンの研究を行った。ユダヤ人であったが、おそらくガンの研究のためか、戦争中もドイツに留まって研究を続けることができた。1970年死去 {丸山工作、1990}。
- 5) Hans Krebsは1900年ドイツに生まれ、ゲッチンゲン大学卒業。カイザー・ウィルヘルム研究所でワールブルクのもとに呼吸酵素の研究を行った(1926年)。ワールブルクに反抗して研究所を追われ、フライブルク大学内科教授の助手となり、1931年「オルニチン回路」を発見した。しかし、1933年、ユダヤ人であるという理由でフライブルク大学を解雇され、イギリスに亡命、ケンブリッジ大学で研究を再開、1935年にシェフィールド大学講師に就任した。解糖系の研究などからハンガリーのセントジョージに先駆けて「呼吸サイクル」を発見した。1939年にはイギリスに帰化し、生化学教授に昇進した。これらの研究によって1953年、ノーベル賞を受賞、翌年オックスフォード大学へ移った。1972年には恩師ワールブルクの伝記を書いた。1981年死去。

なぜこのボーデン湖畔の小さなドイツの町でノーベル賞受賞者の会が開かれるようになったのであろうか。筆者はホテルや町の人たちに訊ねてみたが、誰も知らなかった。しかし、たとえば“50. Tagung der Nobelpreisträger in Lindau (Bodensee)”など(Forssmann, 1971)にリンダウ会議の「歴史と理念」が記されている。また、「朝日ジャーナル」にもこのリンダウ会議の紹介記事が掲載されている(東野紅一、1961)。その概要は以下のとおりである。リンダウの2人の医師、パラデー(Gustav Parade)博士とハイン(Franz Karl Hein)博士は、

ドイツで国際的な医学会議を開催して、第二次世界大戦後、疲弊した敗戦国ドイツの科学者たちを孤立から救おうと計画した。そこで彼らは科学者たちの連携を促進することを目的として、ノーベル賞受賞者をリンダウに招き、ドイツ各地から参加した科学者のために講演して貰おうと計画した。この計画をマイナウ島の所有者でスウェーデン貴族であるベルナドット伯爵に告げ、援助を依頼したところ、伯爵はこの計画に賛同し、世界中の科学者が一堂に会し、相互理解をするための会議を開くことになった。そして伯爵の援助によって会議は実現するに至り、1951年7月、7人のノーベル医学・生理学賞受賞者を招き、400余人の医師が参加して第1回会合がリンダウにおいて開かれた。この1951年第1回会議以来、リンダウ会議は医学のみならず、物理学、化学という自然科学分野を含め、世界中の若い研究者や学生の参加も認める会議に発展した。こうして、毎年、医学・生理学、物理学、化学、と主題を交代し、20-30人の受賞者と約600人の研究者がリンダウに集まり、現在まで100人以上のノーベル賞受賞者がリンダウに参加している。「朝日ジャーナル」によれば、主宰者はベルナドット伯爵とリンダウ市当局、とあるが、現在ではこの会議はベルナドット伯爵夫人ソニアが理事長を務める委員会によって運営されている。

リンダウ会議は月曜日から金曜日までの5日間続き、月-木曜日の毎朝、ノーベル賞受賞者が自ら選んだ話題について講演し、午後、時によっては夜も受賞者たちは参加した学生たちと議論をする。金曜日には全参加者たちは船に乗ってベルナドット伯爵の花の島マイナウ島を訪れ、相互の交流と親睦をはかる。参加者たちは主としてヨーロッパ各地の約50の大学と研究所から選ばれた5-10人の学生と若い研究者たちで、これに加え、さらに限られた数の研究者、学生が参加を許される。一般に若い研究者の2-3倍の数の学生が参加する。参加の資格は研究歴の若い大学卒業生、大学院学生、そしてポストドクである。また、彼らの年齢は20-25歳で、科学に真に興味を持つ者で、研究論文を発表し、奨学金その他、能力を証明する特典を得ている者である。物理学を主題とする第50回（2000年）の会議（図5）では50人の学生、若い研究者が国外から参加したが、その中には日本からも東京大学大学院、物理学専攻修士の学生が参加した（これらに関しては以下の資料によって情報を得た：Brockhaus-Enzyklopadie<sup>3</sup>, 1987; 9, 13, 1990; 14, 15, 1991）。

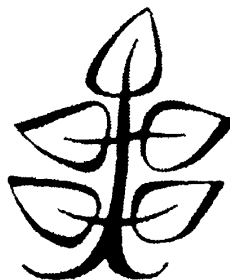
終戦後わずか6年で、ノーベル賞受賞者を招いてこのような国際的な会議を、しかもベルリンやボンでなく、リンダウのようなボーデン湖畔の小さな町で、スウェーデンの王室関係者の援助を得て開いた、というのは学問の伝統をもつドイツらしい。筆者がドイツ各地を初めて訪ねたのは第1回リンダウ会議のさらに10年後の1961年であったが、北ドイツの軍港のあったキール（Kiel）はもとより、ハンブルクやミュンヘンのような大都会でもまだ戦災のあとが残っていた。占領軍に憲法改定のみならず、学制改革を強要され、混乱状態にあった日本に比べドイツは戦後の復興をまず学問の復興から始めたのであるから、さすがと言えよう。



## 50. Tagung der Nobelpreisträger in Lindau (Bodensee)

Tagung der Preisträger für Medizin, Physik und Chemie  
26. Juni - 30. Juni 2000

- Einführung
- Geschichte und Idee
- Veranstalter
- Teilnehmer
- Nächste Tagung



### Einführung

Die Tagungen der Nobelpreisträger in Lindau haben eine lange, ungebrochene Tradition. Seit 1951 versammeln sich in der Inselstadt am bayerischen Bodenseeufer alljährlich zur Sommerzeit im wechselnden Turnus hochrangige Forscherpersönlichkeiten der Fachbereiche Medizin, Chemie und Physik, die für ihre bahnbrechenden Leistungen mit dem Nobelpreis ausgezeichnet wurden. Die Lage der Stadt Lindau in der Kulturlandschaft Bodensee bietet den idealen Rahmen, um den wissenschaftlichen Austausch, menschliche Verbindungen und den Kontakt mit der akademischen Jugend am Beginn ihrer Laufbahn zu fördern und zu pflegen.

Aus allen Erdteilen kommen Träger des Nobelpreises zu dieser Tagung nach Lindau. Viele von ihnen führen die Treffen als festen Vormerktermin im Kalender und unterstreichen mit ihrer wiederholten Präsenz das hohe Ansehen und die weltweite Bedeutung der Tagungen für den Dialog zwischen den Wissenschaftlern über die Grenzen, Staaten und über die Generationen hinweg.

\* nach oben

### Geschichte und Idee

Zwei Lindauer Ärzte, Prof. Dr. Gustav Parade und Dr. Franz Karl Hein, wollten mit ihrem Vorhaben einer europäischen Tagung der Medizin den deutschen Wissenschaftlern aus ihrer Isolation nach dem Zweiten Weltkrieg heraushelfen. Sie sollte die Verbundenheit der Wissenschaftler untereinander fördern, den Gedankenaustausch ermöglichen und Trägern des Nobelpreises Gelegenheit geben, vor einem



#### 4. ベルナドット伯爵とマイナウ島

リンダウ会議は前述のマイナウ島が関係するので、この島について述べておきたい。コンスタンツの北にあるわずか45ヘクタールの小さな島、マイナウ島は“花の島”として知られる(図1参照)。8世紀すでにライヘナウ修道院によって所有されていたが、1272年、ゲルマン民族の一派古代チュートン(Teutone)騎士団の所有となった。その後、ナポレオン戦争に際し、1806年バーデン大公国のものとなった。その後、1853年、バーデン大公フリードリヒ一世(Friedrich I, 1826-1907, 図6)の所領となり、1857年からその死の年、すなわち1907年まで自らの夏の離宮として島を用いた。彼は島に公園を作り、旅をした国々から熱帯植物など、多くの植物を持ち帰って島の公園に植えた。1928年、スウェーデンに買い取られたこの島は、1932年以後スウェーデン王室の縁戚(前国王グスタフ6世アドルフの甥)になるベル

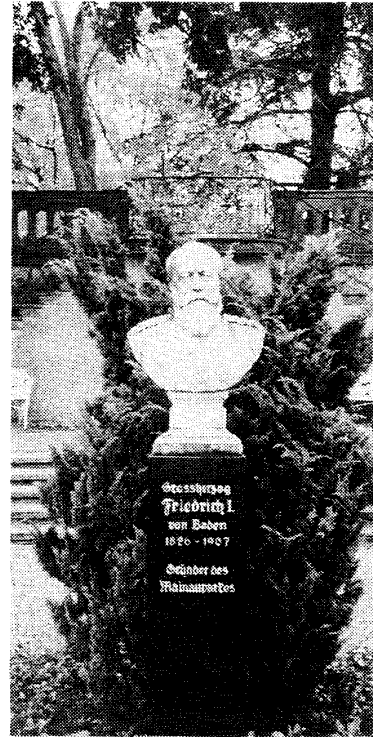


図6. マイナウ島の宮殿内庭園にあるバーデンのフリードリヒ一世の胸像(筆者撮影)。

ナドット伯爵(Lennart Bernadotte)の所領となった。1974年にはベルナドット財団が創設され、夫人ソーニャ(Sonja)が財団理事長となった。伯爵は珍しい植物の育成に努め、この島を“花の船”(Blumenboot)にすることを理想とした。現在は毎年1,700,000人の観光客が集まるほどである。こうしてスウェーデンの国際的な賞であるノーベル賞受賞者はスウェーデン王室ゆかりのこの島に「ボーデン湖会議」の機会に毎年招待されるようになったという。

ベルナドットの名はフランス起源のものであるが、ここでスウェーデンとベルナドットの関係について概観しておきたい。もともとスウェーデンはゴート人の居住地と言われているが、ヴァイキング時代を経て10-11世紀にキリスト教が入ったためヴァイキング活動が衰退した。しかし、内乱に乗じて14世紀にデンマーク兼ノルウェー女王マルガレーテ(Margarethe)がスウェーデンの王権を奪い、スウェーデンは女王に従属するに至った。しかし16世紀はじめ、貴族の一人グスタフ・ヴァーサが奮起し、ハンザ同盟の援助を得て遂に独立を果たし、ヴァーサ朝を開いた。そして17世紀に至り、英明な王グスタフ・アドルフ(Gustav Adolf, 1594-1632、在位1611-1632)が現れ、スウェーデンをヨーロッパの強国の一つに復興した。スウェーデンは30年戦争のさいドイツ新教徒の要請でドイツに出撃し、勝利を得たが、1632年、王は戦死した。次の女王の代でヴァーサ朝は絶え、ツヴァイブリュッケン朝のカール10世が即位した。以後スウェーデンは再び国際紛争に巻き込まれ、カール12世の時代、国際的に孤立して再び小国に転落した。その後、フランス革命に際し国王グスタフ4世は革命思想に対する憎しみから反フランスの姿勢をとったため、ナポレオンの意を受けたロシアの攻撃によって1809年フィンラ

ンドを失った。翌1810年、スウェーデン国会はフランスの將軍ベルナドット元帥（1764-1844）を皇太子に選んだので、彼はカール・ヨハン（Carl Johann）という名でスウェーデン皇太子となった。彼はフランスの弁護士の子であったが、フランス革命の時、下士官から戦功によって出世し、ナポレオンに抜擢されて1804年、元帥となった。スウェーデン皇太子となってからは国家の実権を掌握し、欧州の大勢を洞察してナポレオンの命に従わず、1812年、ロシアと同盟して1813年に反ナポレオン同盟に加わり、1814年キール条約によってデンマークからノルウェーを獲得した。彼は1818年、カール13世の死後王位を継承してカール14世（Karl XIV）となった。彼こそが現スウェーデン王家の開祖である。カール14世は精力的に内政に取り組んだが、しだいに専政君主となり、晩年は国民の批判的的となった。

カール14世の数代のち、グスタフ5世（1858-1950）の甥（Folke Bernadotte, 1895-1948）、つまり王の弟でゴットランド大公オスカルの子がベルナドット家を継いでヴィスボリー（Graf von Wisborg）伯爵となった。そして、グスタフ5世の子グスタフ6世アドルフ（1882-1920）の甥、つまり王の弟ヴィルヘルムの子がマイナウ島領主となったベルナドット伯爵（Lennart Bernadotte, 1909-）である。この間のスウェーデン王室の縁戚関係を示したのが図7である。

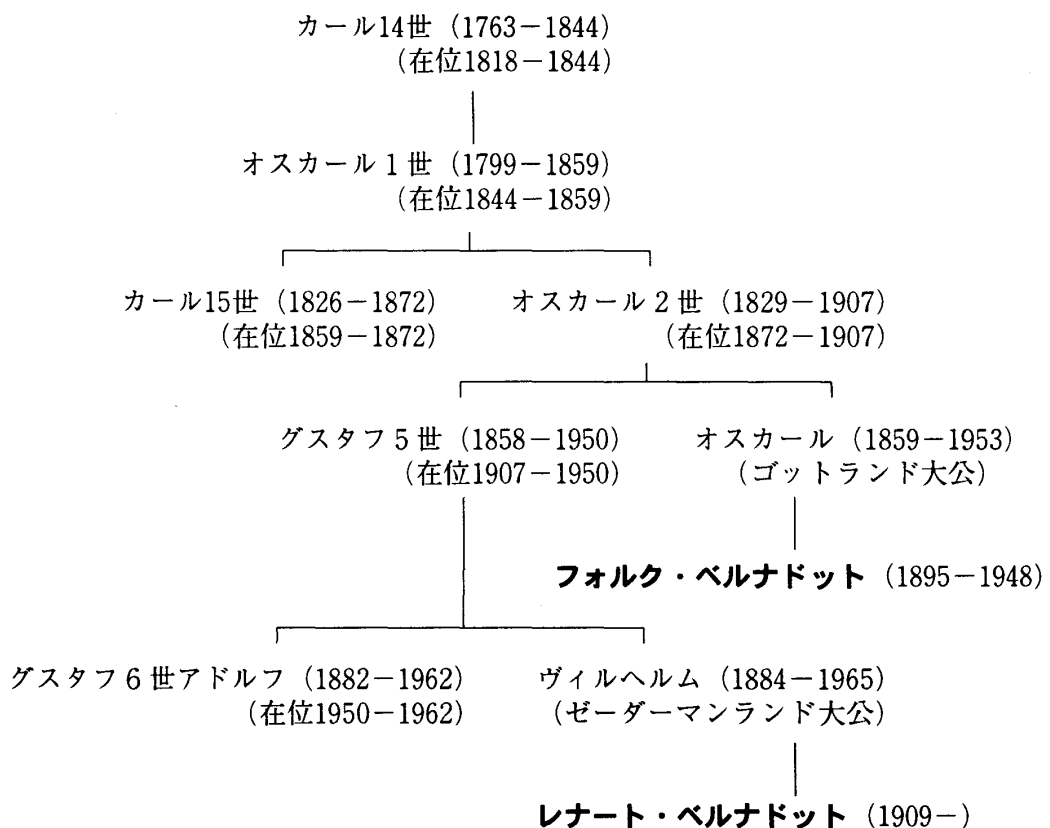


図7. カール14世から20世紀半ばまでのスウェーデン王室の縁戚関係。

ストックホルムに生まれたレナート・ベルナドットは1932年、父ヴィルヘルムのゼーダーマンランド大公の世襲権を放棄してドイツ、マイナウ島を贈られ、この島を“庭園と花の楽園”とした。そして1955-82年の間ドイツ庭園協会（Deutsche Gartenbaugesellschaft）会長を勤めた（Brockhaus-Enzyklopädie 19Aufl. Bd.3）。ドイツ領の中の小さな島をスウェーデン人が所有し、スウェーデン人でありながらあたかもドイツ人のようにドイツのために尽力する、というのは興味深い。

さらに興味深いことに、父の従兄弟に当たるF.ベルナドットは1943年からスウェーデン赤十字副総裁、1946年から総裁を務め、ドイツのみならず国際連合のために尽力した。このベルナドットは1945年4月、ナチスドイツのヒムラーに終戦工作を依頼されたが、これは成功しなかった。これについては次に述べる。彼は1948年、国際連合の仕事で、アラブとイスラエルの間の調停に努めていたとき、過激派ユダヤ人によってパレスチナで暗殺された（Meyers Enzyklopädisches Lexikon, Bd. 3）。

ナチスの終戦工作であるが、第二次大戦終結直前、ベルナドットに終戦工作を依頼したナチス親衛隊隊長ハインリヒ・ヒムラー（Heinrich Himmler, 1900-1945）はユダヤ人絶滅計画の担当者として悪名が高い（増田芳雄、1996）。ヒムラーはギムナジウム（ドイツの進学高等学校）教頭の次男としてミュンヘンに生まれた。海軍軍人を志望したが、近眼のため海軍に行くことができず、バイエルン歩兵連隊の士官候補生となった。第一次大戦終了後、ミュンヘン工科大学で農学を学んで、1922年に卒業し、一旦は化学会社に就職した。しかし、もともと軍隊に憧れていたヒムラーは国防軍と連携していた「帝国国旗団」の騎手となってヒトラーのミュンヘン一揆に参加し、敗北後ヒトラーは投獄されたが、若い小物のヒムラーは投獄を逃れた。その後ナチの運動員として宣伝活動を続け、ヒトラー釈放後、その崇拜者となってナチスの発展に尽くし、ついに1929年、第三帝国親衛隊（SS: Schutzstaffel）隊長、ドイツ警察長官、そして1943年には内務大臣まで兼務するナチスの大物に出世した。1939年、ドイツのポーランド侵攻とともに第二次世界大戦が勃発し、最初ドイツは破竹の進撃によってヨーロッパを制したが、ソ連攻撃に失敗したのち敗勢に転じた。その間、ヒムラーは強制収容所におけるユダヤ人絶滅計画の責任者となって後世に悪名を残すに至る。戦争の最終段階にはヒムラーはドイツ軍の防戦指揮官に任じられ、東西に転戦したが、彼のような素人軍人には任が重すぎた。ヒトラー自殺直前、ヒムラーはヒトラーから総統後継者に指名され、戦後変装し身分証明書を偽造して国外逃亡を図ったが、北ドイツ、リューネブルク（Lüneburg）近郊でイギリス軍に逮捕された。すぐに身分が明らかになり、青酸カプセルを嚙んで自殺した。

ヒムラーはこの間、いつの頃からか戦争の行く末に不安を抱き始めたようで、1945年に入り、スウェーデン赤十字の代表、ベルナドットを通じて休戦協定に向けた工作を行ったが、ヒトラーの自殺直前に発覚し、工作は成功しなかった（谷 喬夫、2000）。

こうしてベルナドット家の二人は国際的に活躍した。年長の一人は第二次世界大戦末期にヒムラーの要請によって休戦協定に向かった工作をおこない、戦後、イスラエル建国時にはパレスチナとイスラエルの和解のため、国連に協力し、その命を捧げた。そして本稿に関係の深いもう一人のベルナドット伯爵は、単に島を花で埋めるだけでなく、ドイツの庭園発展に尽力し、

リンダウにおけるノーベル賞受賞者会議を援助し、自然と学問に寄与している。

## むすび

ヨーロッパの国境が複雑であることはボーデン湖を訪ねるとよくわかる。ドイツはもちろん、この地方のスイスも、そしてオーストリアも言葉はドイツ語であるし、歴史的には共通しており、当然、食べ物、建物、なども似ているから、どの町がどの國に属するか現地では実感が持てないくらいである。シュタイン・アム・ラインなど、1945年の戦争末期には、中立国スイスの町でありながらアメリカ空軍に誤爆され、町の西半分が破壊され、犠牲者も出たという。この欧州最大の湖ボーデン湖は美しく、周りの町々もすばらしい。オペラなど芸術的な催しだけでなく、リンダウ会議など学問的な会合を開くにふさわしい。日本の都会に住み、環境劣悪な大学で研究し、教育する日本の科学者は羨ましいと感じるであろう。

しかし、古くから戦乱、飢饉、ペストなど流行病、宗教戦争、革命、等々、という歴史を持ち、近くはナポレオン戦争にはじまる19世紀以降、ヨーロッパの変遷はきわめて厳しいものであった。さらに、20世紀は2度の大戦を経験し、とくに敗戦国ドイツ、オーストリアの受けた苦難は想像を絶するものであった。しかし、ドイツはあまたの苦難を乗り越えて國を復興し、東西統一後、EUのリーダーとしてヨーロッパの大国に返り咲いた。周知のように、ドイツ（＋併合されたオーストリア）はナチス政権以来、学問その他の分野で活躍するユダヤ人を追放し、そして戦争末期にはヒムラーらの主導によってユダヤ人を絶滅させた結果、かつての学問・芸術における幾多の人材をも失い、世界の非難を浴びた。しかし、戦後いち早くリンダウ会議など、まず学問の復興に努め、学問の國ドイツの復興をはじめたという基本姿勢には学ぶところが大きであろう。複雑な国境のただ中にポツンとスウェーデン領の小さな島があるのも奇妙ではあるが面白い。

謝辞：本稿をまとめるにあたり、本稿執筆の今年（2000年）と昨年（1999年）、ヨーロッパ旅行に筆者と同行し、本稿に関して種々ご意見を頂いた、満州の中学校以来の畏友伊東良太氏にお礼を申し上げます。また、各種資料を寄せて下さったボン大学名誉教授シーファース（Andreas Sievers）博士、ウィーン農科大学名誉教授ヒューブル（Erich Hübl）博士、ヴェルツブルク大学教授ギムラー（Hartmut Gimmler）博士に感謝する。また、資料調査、とくにリンダウとベルナドット伯爵に関する資料に関し、国立図書館およびドイツ・日本研究所図書館と連絡し、貴重な資料の入手を援助して下さった帝塚山大学学園前キャンパス図書館（蔭山久子課長）に厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

- Forssmann, W. (1971) Zwanzig Jahre Nobelpreisträgertagungen in Lindau. Naturwiss. Rundschau 24:47-48.
- Kootz, W. (2000) Lake Constance. Kraichgau Verlag GmbH, Ubstadt-Weiher.
- 加藤 雅彦 (1999) ライン河 — ヨーロッパ史の動脈。岩波新書。岩波書店。

- 増田 芳雄 (1996) ホロコーストの歴史的考察 — ヴァイマル共和国と第三帝国と絶滅収容所。  
人間環境科学 5 : 113-145.
- 丸山 工作 (1990) 生化学の黄金時代。岩波書店。
- 丸山 工作・丸山 匠訳 (1982) オットー・ワールブルク — 生化学の開拓者。岩波書店 (原  
著 : Hans Krebs: Otto Warburg, Zellphysiologe-Biochemiker-Mediziner 1883-  
1970. Wiss. Verlagsgesellschaft mbH, Stuttgart, 1979)
- 谷 喬夫 (2000) ヒムラーとヒトラー — 氷のユートピア。講談社選書メチエ。講談社。
- 田澤 仁・松本 友孝訳 (1996) ノーベル・フラウエン。素顔の女性科学者。学会出版セン  
ター (原著 : Folsing, Ulla: Nobel-Frauen - Naturwissenschaftlerinnen im  
Portrait, 1991)。
- 東野 紅一 (1961) ノーベル受賞者のつどい — ボーデン湖畔で気楽に。朝日ジャーナル7月  
30日号。
- 山崎 和夫訳 (1984) ハイゼンベルクの追憶。非政治的人間の政治的生涯。みすず書房 (原著 :  
Elisabeth Heisenberg: Das politische Leben eines Unpolitischen. Erinnerungen  
an Werner Heisenberg. R. Piper & Co. Verlag, München, 1980)